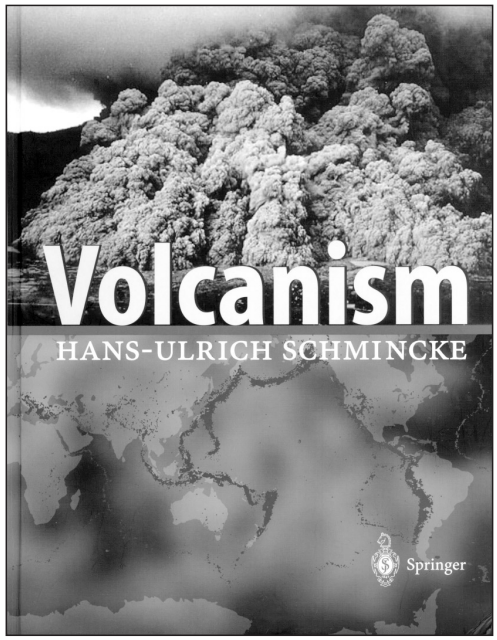
私の本棚

−火山学編−

日本は世界有数の火山国であり，毎年どこかで噴火が起き，何年かに一度は大きな噴火災害に見舞われています．また，温泉や美しい風景など火山の恩恵を多く受け，文学や郷土の祭りなどにしばしば火山の影響が見られるなど，日本国民は長年火山とともに暮らしてきたと言っても良いでしょう．しかし，多くの日本人は火山についての知識をあまり持っていないのが実情です．学校の授業では火山についてごくわずかの時間しか割かれませんし，本屋に行っても書棚には火山に関する本がまったくと言ってよいほど置かれていないというお寒い状況です．ただここ数年，『地球は火山がつくった』（鎌田浩毅著，岩波ジュニア新書，2004年刊）や『世界一おいしい火山の本』（林信太郎著，小峰書店，2006年刊）など，火山に関する啓蒙書のヒット作が出てきており，大手週刊少年誌にも火山をメインテーマにした漫画『カグツチ』（原作は石黒耀著の小説『死都日本』）が連載されるなど，お寒い状況も少しずつ改善されていくのかもしれません．

さて，それでは火山についてもう少し踏み込んで勉強したいという人向けの教科書となると，これがなかなか手頃なものがありません．一昔前でしたら，岩波地球科学選書の『火山』（横山　泉ほか編，岩波書店，1992年）や『火成岩とその生成』（久城育夫・荒牧重雄編，岩波書店，1991年）などを挙げていたところでしょう．これらは1978-80年に刊行された岩波講座「地球科学」シリーズの復刻版（追補付）で，一部にやや時代を感じさせる部分はあったものの，当時としてもよくまとまった良書でしたが，あいにく現在は入手困難です．また『火山の事典（第2版）』（下鶴大輔ほか編，朝倉書店，2008年）は，質・量とも充実した一冊ですが，24,150円と高価なのが難点です．

現在，火山学についてよくまとまった教科書を挙げるなら，英語になってしまいますが『Volcanism』（H.-U. Schmincke著，Springer-Verlag, 2004年）になりましょう．全ページカラーで図表が美しく，それらとそのキャプションを眺めているだけでも一通りの知識が楽しく入ってくると思います．もちろん本文を読めば，基本的なところから最近の知見まで詳しく学ぶことができます．重さ1kgを超える，文字通りやや重たい本ですが，これはお勧めです．



日本語の教科書となると，例えば『地震と火山』（安藤雅孝ほか著，東海大学出版会，1996年）は，後半（2部：早川由紀夫著）が火山の解説にあてられており，内容的に火山地質に寄ってはいるもののたいへん教科書的に書かれています．『島弧・マグマ・テクトニクス』（高橋正樹著，東京大学出版会，2000年）は，沈み込み帯のマグマ活動に関してまとまった教科書と言えましょう．また，『火山現象のモデリング』（小屋口剛博著，東京大学出版会，2008年）は，マグマの移動や噴火現象などを物理的・数学的視点から理解することを目指し，各現象の素過程の基本的なところから解説した力作教科書です．

比較的網羅的で初学者が手に取りやすいものとしては『火山とマグマ』（兼岡一郎・井田喜明編，東京大学出版会，1997年）があります．啓蒙書と専門書の中間的な位置づけの書ですが，火山地質・火山物理・火山化学など広範囲の内容をカバーしていますので，これを入門用とし，章末に載っている関連の文献・専門書などに進んでいく，というのが良いかもしれません．また，『世界の火山百科図鑑』（マウロ・ロッシ他著，日本火山の会訳，柊風舎，2008年）は，前半が火山の教科書，後半が世界の100火山の解説，というもので，数多くの火山や噴火に触れたいという向きにはたいへんお勧めです．

（産総研 地質情報研究部門 東宮昭彦）